

生涯教育研修活動報告書

輸血検査研究班

- 1 実施日時：2024年9月19日 19時00分～20時30分
- 2 会場：ソニックシティビル602会議室 教科・点数：専門教科ー20点
- 3 主題：輸血検査における予期せぬ反応の対応について
～原因と対策を考え、解決しよう～
- 4 講師：柿沼 幸利（バイオ・ラッドラボラトリーズ株式会社）
- 5 協賛：なし
- 6 参加人数：会員 34名 賛助会員 0名 非会員 0名
- 7 出席した研究班班員：宮澤翔子 岩崎篤史 廣田渉 佐々木翔太 大垣秀友 志村祥太

8 研修内容の概要・感想など

今回の研修では「輸血検査における予期せぬ反応の対応」をテーマして研修会を行った。柿沼氏の講演は血液型検査で2症例、不規則抗体検査で1症例、直接抗グロブリン試験で1症例の説明であった。

血液型検査の症例ではオモテウラ不一致となった場合、まずオモテ検査が正しいと仮定した場合に何が異常反応なのか、ウラ検査が正しいと仮定した場合に何が異常反応なのかを考えていくことで、異常反応を起こす原因を把握していくことが重要であるとの説明があった。次に患者情報から可能性の高い原因を絞り、正しい結果までを少ない手数で導き出すことができるとのことであった。輸血検査では緊急性を求められる場合や追加検査に時間を要するものがあるため、前述した点を踏まえることで、迅速に正しい結果を報告することができる。また日本輸血・細胞治療学会から発行されている輸血のための検査マニュアルの中のフローチャートに沿って追加検査を進めていたので、追加検査の選択に苦慮してしまう方はこのフローチャートを参考にしながら検査を進めていく方がよいのではないかと感じた。

不規則抗体検査の症例では同定検査において否定できない抗体が残ってしまった場合の追加検査の方法や注意点などの説明があった。吸着解離試験の原理については図を用いて説明があり、より理解を深めることができた。

直接抗グロブリン試験の事例では血液型検査においてRhコントロールが陽性となる症例をもとに、直接抗グロブリン試験が陽性になる原因や対応について説明があった。寒冷凝集

素が原因となる場合は 37℃に加温した生理食塩水で血球を洗浄し再検査をするが、それでもなお Rh コントロールが陽性となる場合においては、採血後から検体を冷やさないように搬送することで寒冷凝集素の影響を除去することができるとの説明があり、検体採取においても重要な意義があると感じた。

輸血検査において異常反応が見られた場合は様々な可能性を考え、その中から必要な検査を選択し、迅速に結果を導き出すことが重要である。今回の講演で得た知識を各施設に持ち帰り、業務に活かすことで安全な輸血療法につながると考える。今後もルーチン業務で役立つような研修を行っていきたい。

提出日：2024 年 9 月 26 日

文責：志村祥太